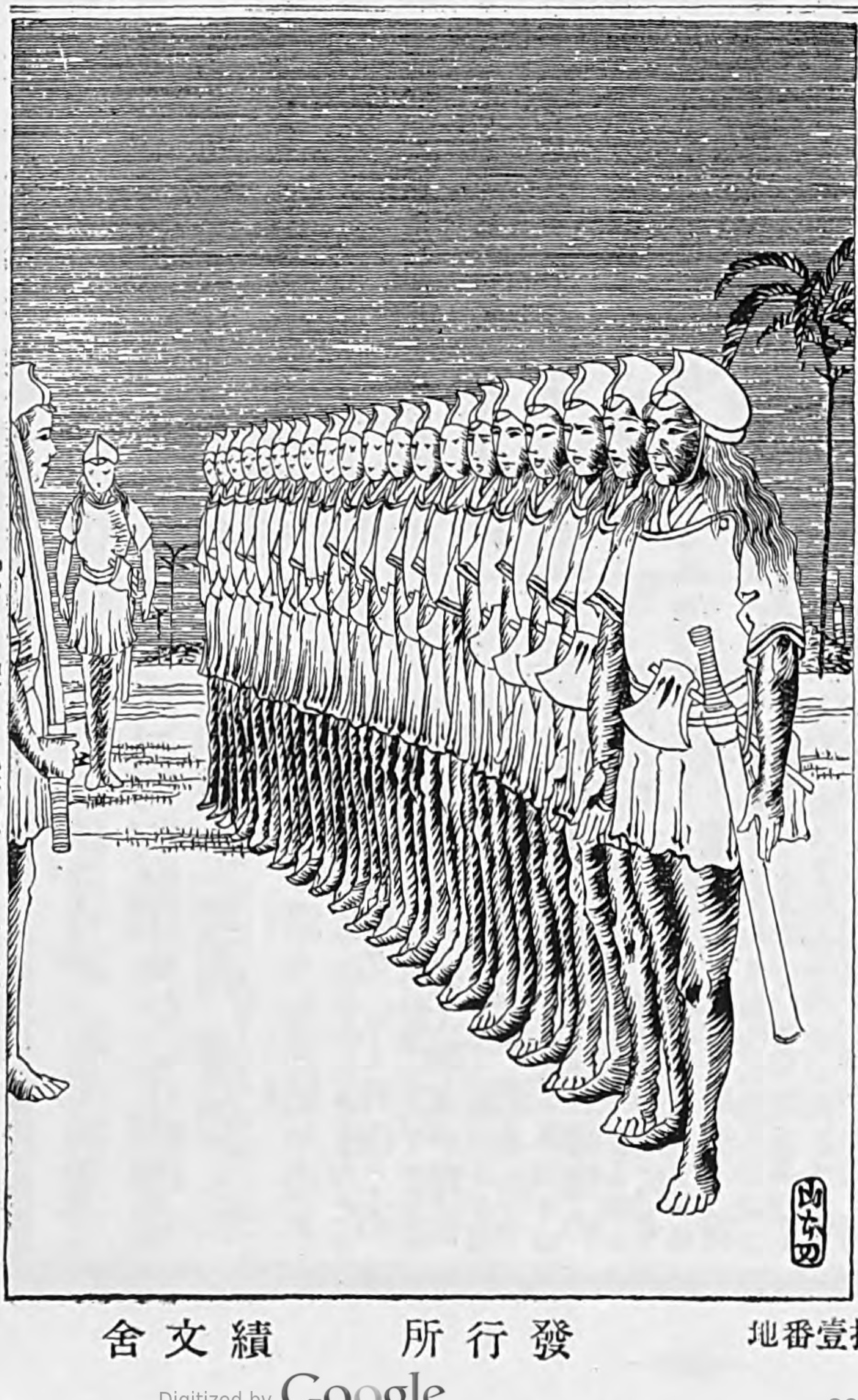
英和語羅馬字對譯插入）

A translation to the English from the Japanese contained.

女學雜誌

驛遞局認可　明治十九年二月二十七日　毎土曜日發兌　第拾壹號



此の繪の說明は本紙中に在り

The Engraving illustrated in another page.

東京京橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(表畫記事)

女の近衞兵士

亞非利加洲に女子の兵隊あるよしハ兼て聞く所ろなるが今その。詳しき報知を得たれば之を記さんに。近ごろ亞非利加のダホメー國王が戰さよ打勝て勳功を現れしたるハ一風變りし兵の組方よ依るとハ云ひながら其實女兵大隊の力らに賴ると最とも多し先頃此の國に游び目の前り此兵を見たる獨逸人ヅレル氏の話しに據れば此女子ハ皆な近衞兵にして現員六千人ありと云ふ而して此兵ハ悉く皇后の號を保有し且つ幼稚ときより体だを達者にするを專ぱらとするが故に力ら飽まで强く勇氣と忠節に至りてハ同國の男子の兵に勝るが如し去りながら直に戰爭を爲す事ハ稀にして只ざ所天と主君とを兼ぬる國王を守護するを任とし且つ舞踏の職をも兼たり故に舞踏と廻轉るとハ最とも上手にして祭日にハ必らず舞踏の催しあり。ヅレル氏の曰く凡そ黑人種の女兵大隊より美麗き兵隊ハ見しとなし此女兵等ハ巨大なる頭よ白き兜を戴き其上着ハ紅色の絹衣下着ハ緑り色或ハ青色なり腕脛及び足を向出しにし而して革の胸甲を着け劍を下げ彈藥の箱を附け其外小さき斧小銃一挺づゝを携さへりと云ふ。士官ハ諸種の色の飾り帶を以て兵卒と區別す現役の女兵の年ハ十八歲以上二十五歲までなりと云々と去る十四日の內外兵事新聞に見ゆ

❀記事❀

○嵯峨野の圖　任天居士

あさぢ生の露にむしの吟はただき。薄かるかや生しげりて。分ゆくはての路もなき遥かあなたよ看經の聲のいと殊勝よあれなるハ。祇王祇女が浮世のちりを避て後世を祈るかくれ家なり。昨日まで金雞障の下よ円づかれて晩暮の鍾にも香魂を驚ろかしたる身が。君恩葉よりも薄くしてたきすての煙りとなりたれは。之や菩提の種となりけん。遂よもへいづるてふ云々の歌をのこして。此の嵯峨野に入り無漏の扉を閉て三會の曉つきと期するなる其まこゝろのすゝきと秋の月よ似たり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎女學叢譚

○第八號の叢譚を讀む（承前）　中嶋ろく子

第三三味線の稽古本の文章ハ浄瑠璃本を基とし河東節を取り交へ其肝要なる善を勸め惡を懲せなる筋目を除きて一重に猥らなる所ろを採り用ひしが故よ常磐津清元富本一中其他とも三味線に於るも文章に於るも多くハ男女の中合を作り其詞ばの仇めけると心ろある親子の間にて顔を赤め合とあしとせす殊よ稽古本の段ものと云バ皆夫の心中を以て骨子とし共よ死ぬとの又ハ連て去くとの始め終りまで俗に云ふ浮氣てふ心を造り出す仕組よして婦徳を堅固よし高尚き氣象を作るなどの思ひハ少しもあハさず。抑も日本の惡弊として女子生れて七八歳に至れバ貧富上下の差別なく藝人となると否とよ拘ハらず必らず三味線の稽古を敎ふるを以て親の義務とあさる〻が如し何さま三味線ハ音樂の一ッにして和融を導びき自他の心を娛しましむる功用ハあるに相違あきも斯の如き猥らなる詞ハを女子七八歳ころの腦髓に染しましさらんにハ其結果ハ如何に候や誰人も全艮ある女子とあるとハ思ひ給ふまじ必らず浮さる心を永續そると考へらる〻あらん已よ浮さる心を永續す故に文明の培養さる新聞雜誌を見るも爲に相成と道德の筋に關つらふとハ之を讀ずして夫の浮たるとや男女の中合の續き物語りハ眼を細ふして讀る〻なり實に怪しき事と謂べし是に於てか音樂取調所に於てハ謌に茲に心つかれ追々文章を改ためられしも十中の八九ハ尚ほ古き稽古本を以て敎ふるの有樣なり何卒か〻るとハ法方を定ていち早く改ため度とにころ

第四踊りハ右に申す三味線を詞ばを基として舞踏する者にて此踊の面白して爲す段ものハ是れまた心中の外に出ず夫の阿半長右工門阿染久松なとの類是なり諸卿よ諸卿ハ此三味線と踊りとを合それバ其女子の心ろに如何なる事を畫き出すと思ひ給ぞ妾の見る所ろに據れば浮たる詞バと情を覺へ次よ浮たる事の形を實地に演するなれば取も直さず之を敎へ學ばしむる親御ハ其子をして浮氣に導びき婦德を汚す事を勸むると云ふもあしからず親御已に斯の如く子已に斯の如し其子ハ又如何ならん如何に日本の文明を進むんとそるも得べきとにあらずかし豈かなしからずや

○女子に猛省を促かす（承前）　富森漁夫

所天が斯る惡して行なひを爲すも其妻ハ自から得る賃金を以て家事の入用に充る業を知るを以て家の財の散ずるも格別心

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ろに留ぬ風あるなり故に余儕ハ人の妻の工業をなすハ必らず幾分か所天の放蕩を助くると云る奇説を以て自のら信を置なり且つ只だ所天の放蕩を助くる斗りでなく其差響の及ぶ所ろ之より甚だしき者あり蓋し其母の仕事場に在や其童子ハ家に父母居らざるを以て恣まゝに街々を遊び歩き悪き友と交るが故に遂に童子をして懶惰放逸の性を造らしむる怖れあるなり世の父母の其子を扱かふと殆んど禽獣の其子を扱かふが如き者あり童子にして一旦斯る扱ひを受れば後來如何なる良き方法を施こすと雖ども必らず幼稚ときの癖を取り去ると能ハず人体學者及び醫士の説に據るに小兒の時に施こせし最初の教訓ハ其心に染こむと深くして之を忘るゝと嘗てなく如何ばこの老年に及ぶも其跡ハ殘れりと世人若し此説を聞のバ其子に對して第一の教訓者たる母の任を以て如何なる者となすや若し又上等社會に在て母の任を尽すと全たかふずして之を職人の妻に比べて卓然抽いでたる所ろなくんば將た之を何とか申さん

人の母にして其任を勤めざる者ハ毫しも物の理人の道の教訓を施こさゞるを以て賤しむべく厭ふべき見を造り出さん然るに其任ハ背のずして善く才智と人の道を教訓する眞誠の母親に於てハ貴とむべき愛すべく且氣象剛毅精神鋭敏なる子を造り出すべし此の二ッの間に於て確かに其効を異にするを見ると雖ども世人ハ猶ほなんぞ其是非を擇むに躊躇ふ所あるや

詞花古今集

富春漁父撰

○俊基朝臣道の記

落花の雪に跡ふよふ片野の春の櫻かり紅葉の錦を着てかへる嵐の山の秋の暮ひと夜をあかす程だにも旅寝となればもの憂に恩愛のちぎり淺からぬ我ふる里の妻子をバのくへも知らず思ひ置てとし久しくも住なれし九重の帝都をば今を限りと顧り見て思ハぬ旅に出たまふ心の中ぞ哀れなる憂をばとめぬ逢坂の關の清水に袖ぬれて末は山路を打出の濱沖をはるかに見渡せバ潮ならぬ海にこがれ行く身を浮船のうきしづみ駒もとどろに踏ならし勢多の長橋うち渡り徃かふ人に近江路や世を宇根の野に鳴田鶴も子をおもふのと哀れなり時雨もいたく守山の木の下つゆに袖ぬれて風に露ちる篠原やしの分る道を過**ゆけば鏡の山ハありとても泪に曇りて見へわかずものを思へ**ば夜の間も老蘇の森の下草に駒を停めて反り見る古郷の雲や隔つらん番場醒が井柏原不破の關屋ハあれ果てなほもるもの

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

れ秋の雨のいつか我が身ハ尾張なる熱田の八劔ふし拜み潮干にいまや鳴海潟のさぶく月よ路みへて明ぬ暮ぬとゆく道の末ハいづくと遠江濱名の橋の夕汐よひく人もなき捨小船しづみはてぬる身よしあれば誰の哀れと夕暮の入相うてバ今ハとて池田の宿よ着さまふ。元暦元年の頃のとよ重衡の中將東夷の爲よとらはれて此宿よつき給ひしよ吾妻路のはよふの小屋のいぶせきよ故郷いのよ戀しのるらんと長者の女の讀さりし其古への哀れまで思ひ殘さぬ泪なり旅館の燈しびのすのにして鷄鳴あのつきを催ふせば匹馬風よ嘶いて天龍川を打度り佐夜の中山こゑ行バ白雲みちを埋め來てそこともしらぬ夕暮よ家郷の空をのぞみても昔し西行法師が命なりけりと詠じバゞ再たび越しあとまでも浦やましくぞ思ハれける隙ゆく駒の足はやみ日巳に停午にのぼれば朝餉まひらそる程にとて輿を庭前に舁とゞむ轅をさゝきて警固の武士をちのづけて宿の名を問せたまへば菊川と申すところなりと答へければ承久の合戰の時院宣のきさりし咎にて光親卿關東へ召し下されしが此宿にて誅せられしとき

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡
今東海道菊河　宿西岸而終命

とかきたりし遠き昔しの筆のあと今ハ我身の上になり哀れやいとゞまさりけん一首の歌を詠じて宿のはしらにぞ書れける

いにしへもかゝるためしを菊川の同し流れに身をや沈めん

大井川を過さまへバ都にありし名をきゝて龜山殿の行幸のありし嵐の山の花ざかり龍頭鷁首の舟よのり詩歌管絃の宴に侍りし事もいまハふたゝび見ぬ世の夢となりぬとおもひつゞけ給ふ嶋田藤枝にかゝりて岡部の眞葛うらがれてものかなしき夕暮に宇都の山部を越ゆけば蔦のへでいと茂りて道もなし昔し業平の中將のそゝ家もとめんとて東の方へ下りしに夢よも人よ逢ぬなりけりと讀たりしものくやと思ひ知られたり清見潟をすぎ給へバ都にかへる夢をさへ通さぬ浪の關守もいとゞ涙を催され向ふハ那處三保の崎興津かん原うちすぎて富士の高根を見たまへバ雪の中より立けむり上なき思ひにくらべつゞめぐる霞に松見へて浮しまが原すぎ行ば汐干やあさき船うきてなりたつ田子のみづからも浮世をめぐる車返し竹の下道ゆきなやむ足柄山の峠より大いそ小磯みおろして袖にも波ハこゆるきの急くとしもハなけれども日數つもれば七月廿六日の暮に鎌倉にころハつき給ひけれ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎歐米女學の枝折

いろは游戲　（承前）　拡月嶺風樓重譯

阿町姐(ム)妾はむと愛する者を同じくします彼は沈默にて涙語を言ず無理を云ねばなり然し又惡む所以あり彼はむだ食むだ遣ひを好み又妾が名を取て無理取無法者の名とし顯微鏡にも云ひ百足狢　鼯鼠等にも呼べり而して彼は睦造と云ひ一月の六日武藏の胸突坂より來れり

阿今姐(ウ)妾はうを愛します其故は彼は賣卜者にて雲氣を見るヿが巧手なるを以てなり去り乍ら亦た厭ふヿあり彼は浮氣者にて嘘つきなればなり彼は而して妾が名を團扇に名づけ馬屋牛屋鰻屋にも號とし植木魚春さへと呼べり彼を宇助と云ひ本居は宇治なんど洛西の秦に住りと

阿蔦姐(井)妾はゐと愛を共にします田舍者にて禮敬の心あつきを以てなり然し又忌ますヿが御坐ります食坐して身代を破り今食客の身なればなり彼は妾が名を位配に記し野猪家にも呼びたり彼が名は猪之助と云ひ院の庄の井戸堀なり

阿熊姐(ノ)妾はのを宜しふ御坐ります彼は能在言を善し能書なるを以てなり又妾はのを増みすま彼は放蕩ものにて妾が名を帘に記し鑿仔鋸り及び小蒜海台にも用ひさり彼は飲介と云て能登より參りました

阿虎姐(オ)妾はおと愛を等しくします何と申せば彼は生來嚴格にて製度を能く守ればなり妾は又嫌ふヿあり只だ大食にて覺へはろく愚の上に阿ると多ければなり而して又妾が名を諧謔にも諂擧にも云ひ鬼狼　等　種々の名となしさり彼は音吉と云ひ隱岐の國の織物屋なりと

阿稻姐(ク)妾はくを愛します如何となれば彼は公家華族にて草双紙の作を善すればなり妾は亦たくと彼を憎むヿあり彼は口癖わるく食たがりて愚物なればなり其上妾が名を靴屋櫛屋の號となし熊鯨　馬　蜂及び糞むし蛛等に用ひたり彼は雲助と申して熊野の山奧の者なり

（終）

以上の如く結局に至るまで同じ趣向にて話す慰さみとす

○西洋謎の解

本誌第六號謎の解の投書方百二十一名の内解當するは左の如

(四)昨日　神田杉田於玉姐○群馬前橋形生○横濱於菊姐○根岸岡本於芳姐○埼玉川口星野於國姐

(五)莫大小　淺草閑人○本所常磐木○日本橋於富姐○芝櫻川○本郷山本於園姐

同第八號の解八十五名の内解當する者左の如し

(五)明日　根岸岡本於芳姐○靜岡山口於とし姐千葉山崎姐○淺草田人○築地奥山姐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(六)鍵　○兩國藤田於今姐○本所常磐木

○同　新題

(八)　肌膚雪白にして上に白き肌着を着し歐洲風の女服を裝し而して獄舍の裡にあるも尙ほよく小兒の親愛を受る者ハ何ありや

(九)　多く増せバ尙ほ輕くなる者ハ如何に

◎内外雜報

◎御命名式　去る十日御降誕あそばされたる皇女の御命名式を此の十七日宮中に於て行なはせられたるが御名を靜子と申し上け久の宮と稱し奉るよしに承たまハる

◎英女皇の財産　英國女皇の私有せる財産ハ凡そ八十万弗にして毎年の歳入ハ凡そ三百二十九弗なりと

◎菓子の稅金　下戸の建たる土藏もなしと申しますが何さま昨十八年七月後半期分の菓子の稅ハ日本ばし區の第一が西川岸の榮太樓にて金七百圓餘又京橋區ハ南傳馬町の風月堂にて金五百圓なりと是でハ酒を召あがらずとも土藏の建つ故がありません

◎東洋繪畫共進會　來四月一日より上野公園内に於て開く同會の事務協議の議決を聞に(其一)陳列場區畫を八區とし第一區ハ土佐、光琳、巨勢、宅摩、住吉。第二區ハ狩野、一蝶、相阿彌、長谷川、雪旦。第三區ハ南北兩宗。第四區ハ圓山、四條、岸、鹽川、容齋、鈴木、第五區ハ浮世繪にて菱川、宮川、歌川、長谷川○第六區ハ雜派、新機軸のもの。第七區ハ自身の好みにて本會の審査を求めざるもの。或ハ規則に觸れ寸尺違等にて都て審査を要せざるもの。第八區ハ古畫參考品と別つ事(其二)審査員ハ出品人より畫家十五名を公撰する規則なれども猶繪畫會より畫家と否とを問ハず熟練なるもの五名を特選して補員となす事(其三)褒賞ハ金章より褒狀に至る四等に頒ちされど も更に褒狀を一等より三等迄に分つ事(其四)出品目錄并に出品圖貼紙へ揮毫者の年齡を記し事等の事項なりと

◎何と思し召　世の中か開くるに從かひます〳〵學問の必要なるを感ずるハ今さら申すまでも有ませんが茲に最感心なるハ他よハ彼此と賤しめらるゝ俳優渡世の澤村訥子の妻のはる(二十六年)ハ兼て讀書習字よ執心なるが家へ敎師を請して學ぶ力もなく去とて已も口惜とて今度大奮發にて我家近き淺草の待乳學校へ入學し中等三級生の内に入り日々勉强してゐるそうでそが誠に殊勝の心かけであります年を取て仕方がな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ひと自から楽る方々何とおぼしめす

◎看官に申す　女學雜誌ハ號毎に改良を加へ殆んと其底止する所ろを知らずと申す沁組に付き左樣御評判を願ひます且つ本號より頴才貴女十四年以下の方々の自書を表紙へ差加へますゆゑ表書の寸法にて御自書を澤山御贈り願ひ上ます

◎和英語羅馬字對譯〔いろは骨牌〕

(和) 月夜に釜を偸く
(羅) Tsuki yo ni kama wo nuku.

(英) One steals one's kettle in the moonlight night.
人ガヌスム人ノ 釜ヲ 於テ 月 夜ニ
一 七 五 六 四 二 三

(和) 念には念をいれ
(羅) Nen niwa nen wo ire.

(英) Be careful more and more.
アレ 注意シテ マス マス
五 四 一 二 三

(和) 泣面に蜂
(羅) Naki tsura ni hachi.

(英) The weeping face a wasp stings.
泣ク 面 蜂ガ 刺ス
一 二 三 四

正　誤

第九號本欄内(わ)(英)ノbroken ハ broken ノ誤り
同(か)(英)ノdieigelure ハ diligense ノ誤り
第十號(ろ)(英)ノ Elder son ハ Eldest son ノ誤り
長子 長子

◎内外烈女傳

ウエラサシユリッチの話し　つゞき

今ま諸君の面前にある所の囚人ウエラサシユリッチて云ふ女子はカルユッ郡に生れ其父をサシユリッチと呼做し陸軍の大尉にして胸に聖恭耳治の十字勳章魯國勳章の名を懸て合戰の場に其身を擬うち往年トルキスタンの役にハ浩々として垠なき絶漠を渡り黒海の苦戰にハ血を啜り創痛に耐てセバヌトホールの塞壁を死守しシルガアシの征討にハ峨々たる峻嶺を跋み牧馬悲鳴の原野を過り以て我が皇帝陛下と我が魯國の爲に肉を無限の溪底に墜し血を繁水に流す事實に枚擧に遑まあらざるなり生とし活る物の壽夭常なきハ是れ浮世の習ひなれバ力ら山を拔き氣世を覆ふ稜威の伴の雄も疾病にハ克こと能はずして陸軍の大尉サシユリッチハ一朝病ひに罹り溘焉として墓なくも此世を辭し殘る者は此少女と母とのみ其時此の母と孤兒の不幸は果して如何ありつらん其父サシユリッチの世にある中に職を奉じて大尉の官俸を給ひたれば衣食に不自由なかりしも軍人の常として給ハる俸給ハ擧けて之を劍と馬の代に抛うち毫も子孫の爲に田宅を買ふの餘りあらざりしかバ一朝永訣を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

告たる後ちハ家ニ蓄はへの財産なく弗函ニ一片の金帛なく剰さへ朝廷よりの俸給も唯だ父の一身に止まりて其の孤兒寡婦には傳へ及ハず當時此一孤兒の身の上に掛りたる不幸の景狀を語り出さば諸君は定めて悽然として其悲しき境に陷りたる愍れの狀を想ひ遣り其躬親から其悲境を目擊するの感に堪へざるべし此女子の既に父を喪ひて後ちは此世に杖とも柱とも賴むべきは唯だ一人の母あるのみ女子生れ得て孝純專はら其心と其身とを孝養の一途に盡し其入てハ母の愁傷を慰さめ其出てハ生活の代を得んと欲し唯だ起居の安らかならん事をのみ務とす之を世間一般の少女たらしめたらんにハ珊瑚の靴さくらの插花陽春限りなき暖風

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に乘し郊野に青を踏事を娛しみ鶴毛の衣貂皮の手襁朔風を忍びて凍池に氷りの遊戲を爲すべきの年齢なれとも此十八才の少女ハ夢だに是等の歡娛遊戲の思ひなく只管辛苦勞働に堪へて百方生計の道を求め屢々び跌きて彌々ふるひ一心の到る處ろ竟に數學の術を得て六七人の幼年生徒を敎授する事となり其生徒より納むる所の學資と謝儀とによりて纔かに其母と吾身との露の命を繫ぐに至れり然ハあれども薄幸なる此母と兒ハ唯だ飢を凌ぐ迄にして其の住佗る庵は屋破れて雨漏を防くに足らず壁隨て風透を遮ぎるに足らず葎ら庭面せに生ひて踏べき路も有かなし亡父在世の日に比較れバ盛衰地を易へ禍福處を異にし仰いでクラコフ山上の明月を眺むれバ亡父が勁馬に跨がりて凱歌を唱へし往時の秋を懷ひ俯して洛盤河畔の花を看れば却て今日艱苦の春を傷む斯る天命うすき兒と母との境界ハ一層母子の情愛を加ふるの種となりければ其の互に相繼續するの心情は尋常母子の間に比すれば更に戀慕さを加へてけり是れ當時此少女の世を過ぐ樣に候らひぬ(未完)

○加賀の千代の事

世に名高き加賀の千代ハ同國松任の旅店の女なり幼稚ときより誰をしふるともなく俳諧を好みて吟さみたるか未よろしき師を得ざれバ人に逢ごとに亘師ハ誰なるやを問けるに美濃の國の盧元坊ころ此道の達者なりと云にぞ左らバ此人に就て學ばんと思ふ折ふし幸に盧元坊ハ行脚して松任に來りければ即ハち請じて家へ招きぬ元坊ハ此日痛く草臥たりとて寢たれども千代が志ざしの厚きを聞ものから然らば一句詠せよと云ふ時夏の初めの頃なれば時鳥を題として一句作りしに元坊ハ尋常ならぬ氣韻あるを見て故意と此の句わし〳〵と云て今一度作るべしと望む千代又一句作りしに是またわし〳〵と云て逐に寢ゐりに就けるが千代ハ枕邊を去らずして沈吟じて其眼の覺るを窺かふてハ作りし句を見せ數句に及ぶうち曉きに至りたり元坊起て終夜ら去ざりしを驚ろく時千代ハ徐かに「ほと〳〵ぎす〳〵とて明にけり」と云ふ句を作りしかば元坊大に賞稱し俳諧の極意ハ誠に其の如し吾子日を經るも決して忘る〻となければ必らず天下に名を揚んとて師弟の約をなせり後ち果して此道の名人とハなりぬ千代廿五歳にて所天を亡ない其子を跡嗣となし身ハ尼となりて一生二夫に見へさるの古訓を守りたり

○遊女白糸の節操

白糸ハ新吉原江戸町二丁目角山口にて〻唱家の游女なり容貌しきうへ敷嶋の道にも達し花月を弄あそぶ心よりして情ふかく

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一旦鳥井某氏と云る人と妹背の契約をなせしが月に村雲のならひにて或る思ひも知らぬ田舍人の通ひ來て急ゑ身受せんと計りけるゑ白糸ハせんそべなく鳥井の許へ其所由を詳に認ため記念として白無垢へ

糸ゑよるものとき〻しが別れぢの我名にか〻る涙なりけり

と書しるして贈り其夜廓を逃れいで隅田川へ身を沈めて敢果なき身となりにけり。路の柳人の折ゑまかせ垣の花人の眺むるに從ふの游女ゑして一旦妹背を約し變せざると斯の如し今の尋常の女子を見るに一度夫婦の約をそるも其所天貧しくなりて袖に涙のか〻る時ハ之を棄て他の富貴の人に從かハんとそる有樣わり實に淺ましき限りにして此游女ゑも劣りたる女子と謂べし

女子の學ひ

○女子の十能

むかし女子の十能と云しハ第一織梭裁縫　第二手跡　第三和歌俳諧　第四香道　第五茶の湯　第六箏曲　第七繪書　第八雙六盤　第九韻ふたぎ　第十篇突　是なりし今より之を見れば皆游藝にして一家の母として其兒を敎へ導びく助けせならぬ者ゐはし蓋し世の移り變りにつる〻者なれば深く咎むるに足ずかし余儕記者ハ左に目今りの女子の十能を擧べし其可否ハ人の擇むに任そのみ

第一學問　他日一家の母となりて其兒を敎へ導びき兼て所天ゑ代りて家を治むる智識を硏く爲なり

第二筆算　手跡ハ文の贈答に必用なるハ勿論家を治むるに欠可らさる者なり算も手跡と同じく日々肝要の者なれバ也

第三裁縫　母の手を助け又ハ所天我兒に淸潔せし衣類を常に着する爲なり縉紳なれバ寸尺等の指圖及び所天の好ミを調査ためなり

第四献立　料理ハ自から調製それば費を省くのみならず所天が時ならぬ望みにも應ぜられ召仕を置く家にても之を指圖そるに方法を知らでハ其詮なければなり

第五諸禮　諸禮ハ身の取まハしを善するのみならず交際の上に最とも入用にて殊に貴人の御前へ出る時なとハ此の諸禮の心かけなくてハ叶ふ可らず

第六音樂　音樂ハ禮を正しくそるの音調をふくみ居り又父母所天を慰さめ一家の和融を計るに最とも妙なるのミならず自から心神を娛しましむるの德わればなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第七細工　細工とハ編物又ハ造り花等の事を云ふ此れ兒供の用品或ハ座敷の表飾を増に肝要の物なればなり

第八和歌　和歌ハ友なき徒然に獨り心を慰さめ懐ひを述べ又ハ文章を連ぬるよ大なる助けとなるが故なり

第九繪書　意匠を高尚し物の氣取に匠ミになり坐敷の表飾又衣服の染模様の見立を美麗くし殊に何れの地に至るも佳景色を寫し來りて物語の助けとなり且ハ我が娯しみよ於て無此上物とす

第十化粧　化粧の巧手と拙なるとハ女子の容貌を善悪する者なれば最とも肝要とす殊に髪ハ假令髪結に結する方々にても其實ハ自から結で叶ハさる事なり今の如く髪結に結するハ畢竟藝妓娼妓より移り來りしとにて完全の女子の爲すべきとにあらず西洋に女髪結なきにても知るべし故に余儕ハ髪結とを十能の中に加ふ

○女用文詞の説明し幷に活らき

○鶯の笠縫ハ　鶯の啼ながら木の間を彼方此方と飛ちがふ様の管笠ねむに似たれば斯く云なり古今集に　鶯の笠にぬふてふ梅のはな折てかざゝん老かくるやとあり催馬樂が本なり

○霞の棚引のたハ發語にてなびくとなり

○垂籠ハ御簾几帳など垂て其内に引こもり居るとなり

○仰せ　おハせに同じ負せなり物事まかするよりいてと詞ハともなれるなり如し仰ハ俗よおつしやる通りなり

○厂の玉章ハ漢土の蘇武の故事なり玉章ハ文をいふ

○あなかしこハ恐惶謹言と同じ。かしこまめでたくを冠らするハ謂れなし又かしこをかしくとするも正しからず(畢)

○洋食の食様

第一　食事の節に餘り大きく口を開く可らず又喉をならす可らず大口よ充滿ハ最とも無禮なり

第二　麪包の食し方ハ手にて裂き其裂口にバタを付て食すべし決して庖丁にて截る可らず

第三　バタを取ハ巳の庖丁にて取べからず是れ猶は日本に於て巳の箸にて香の物を取ざると同じバタを取べき物別に添あれば其にて取べし

第四　若しバタ肉刺にて刺し其背の方を汚すとあれば口拭にて拭ふべし

第五　魚の玉子焼の和かなる物ハ三ッ股の肉刺にて食すべし

第六　凡て食物の換りを望む時ハ庖丁三ッ股を麪包の上に置べし是れ其禮式なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第七　食卓に向ふには正しくして決して之にもたれ可らず
第八　二人以上向あふて食する時は人の脚に我足の觸らぬ様食卓の下にて餘り足を伸さぬと肝要とす　（以上）

◎英學手引草

（—）此をテ゜ス゜と云ひ文句の組立急に變りたる時などに用ひ又は次の如し下の如しと下段へ移る時などにコロンと一處に用ふることあり（）此をパレンテシスと云ひ文を說明す爲の註を號しに用ふ［］此をスデケッツと云ひ原文にあき語を挿み入る時に用ふ（" "）此をクテターシユンマルクスと云ひ他の書より他人の談し引用ふる時の號しに用ふ（—）は長聲の號し即はちAを長くゑーとするときAの頭へĀの如く置なり（˘）は短聲の號し即はちBをびいと云ずビと音を局るときBの頭へB̆の如く置なり（：ヽノヘ）は何れも字音の剛き弱を示す號し又變化を示す號しなり（ヘ）は字を略そに用ふ號し（＊此は讀まずべき字又は語を書かずして此の號しに代り用ふひとあり）

記號は猶あれども主たる者は大低以上の如し右常用の外に（、）と（、）とを略字の符號に用ふることあり其時は（、）を高くかけて文字の左りの肩に置く（、）は文字の右の下に置なり其例

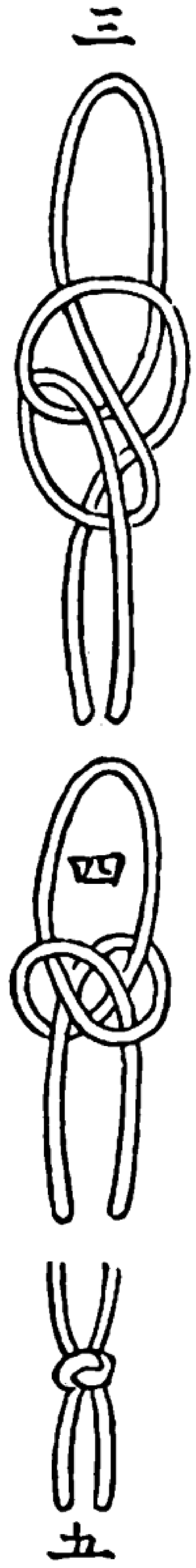
'tis は itis の略 don't は donot の略なり

（以下次號）

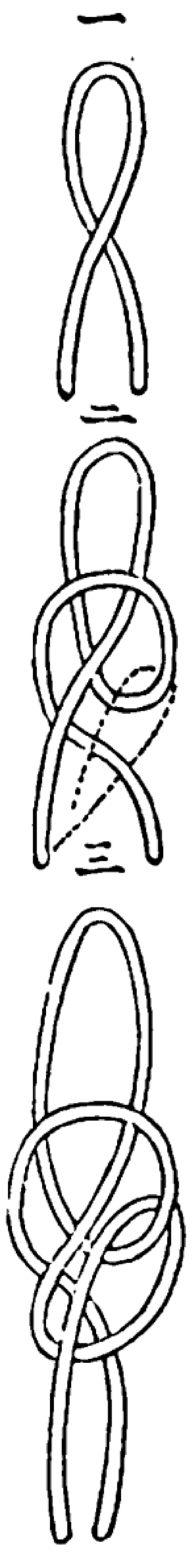
◎女紅

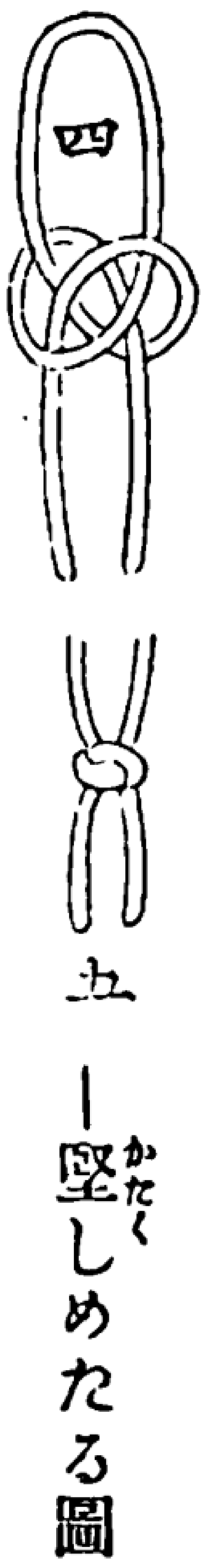
○むそびの記前號續きの圖　伊勢貞丈

堅くしめたる圖



女子むすびは右の男子むすびを彼方此方にしたるなり男子と女子むそびは自から結ばねば知れぬ者なり圖左の如し





一堅しめたる圖

○化粉のまき

白粉を附るには先白粉を額につけて之を指先にて徐にまはしく〳〵して斑なく延し夫より又白粉を手の掌に取て両眉の上の方より眉の間に附け又徐かに斑なく延し両の頬鼻の上より鼻の両脇口の上下左右耳の後ろ首筋咽と一所つゝ白粉をつけ指先にてそろ〳〵と廻してよく延そべし今時白粉をつける人を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

見るに十人に五人ハ白粉の解かた暴く且一時に手に溜て額頬鼻なんど初めより附をきて而して延さんとするが故ヨ初め附たる白粉ハ顔の暖まりと風の中りたるとにて乾き固まりて延がたく光澤を失なひ落付ぬ者なり故に一所ッ、段々と附て之を延しよく白粉の行わたる様に心かけべし白粉もきわたらば眉刷毛に水を少しつけ輕くされ〳〵と丁寧に幾たびも刷べし斯すれバ白粉よくのびて光澤よく出るなり兎角眉刷毛の遣やう少なければ白粉うきて見苦しきなり

右の如くなせし後ち顔に少し風を受け而して後ち紙を顔にあて(美濃紙か又半紙)眉刷毛に水を少しつけ紙の上より又幾度も刷べし斯すれば白粉ハ一様に落つき班なく奇麗に光澤を出すこと妙なり

○俗曲の沿革

此頃文庫より出たる古寫本を見しに三味線俗曲の移り變りを記せり其文古奇にして章をなさゞれども昔しの有様を知るにハ其の儘の方よからんと思ふまゝ修飾せず記す事左の如し

むかし古戰の折かけをうつして天満といふもの說經と號けてうたひしとぞ舞といふ俗曲ありしがそれを轉じて俚俗の語を以て作りしと見ゆ予が幼年の頃まではうたはしを覺へし者ありしが。いつとなく絶ぬ亦薩摩淨運といふもの之を變じて世俗の悅ふ如く文句を作り一曲を始めしに淨瑠璃姬といふものをたてゝ作りし故世に淨瑠璃と稱しておのづから曲の名となりしとぞ。文句ハ小野のお通が作りしものといへり。京に一中と云ふ一向宗の僧の變じたるが一曲を制し都太夫とて上方に流行しとぞ其旨淫にして東人ハ好まず。和泉太夫といふもの賴光四天王又ハ義經辨慶などの事を專ばらにして軍物語をつらねたるが予が幼年の頃流行しとぞ亦土佐といふものあつて貴賤上下是を悅こび元祿の頃まで是をうたハざるものなし其文句節婬なりといへどもうたひものゝ遺風を轉じたりと思ハる亦半太夫といふもの其季に出て交はれり是ハとろけて聞へし大坂に義太夫といふ者いでゝ近松門左エ門といふもの文句を作り世上もてはやし江戸へもうつりしが享保の末より豐後節始まり淫にして悲しく俗話にてつらねしが大坂に初り京にうつり江戸に流行來て江戸中うたわぬものなく巷に溢れ常に往來する人の謠吟を聞にとろけて悲しく戯れて耻を知らず褻果たる聲斯もあるものにこそ。元文の初にや暫時制禁の事ありしが頓て亦益さかりにして上下淫聲を出さぬハなし淫聲の人をうごかす誠に奇なるかな。男女の心中とて相對死そる事

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

京大坂の風たりしが今はいつしか江戸へ移り年々たえず其上貴人の息女姉妹など出奔の事聞も及ばぬ事なりしが今は常の事となり耳をそばたてゝ○○○○○聞ものなし上方のならはせいつとなく海邊にみちて元來の江戸の風絶はてゝ大名高家の歴々にも此悲音を翫ぶ事に成ぬるも〳〵いかなる事にや

◎群芳詞苑

○明治十九年一月廿五日御兼題　禁中雪

高御座近きまもりの櫻花咲のと見えて積る白雪　郁子

踏分し跡こそ無れ九重の御階をかけて積る白雪　實則

雪積る朝に見れば大宮の軒端に續く富士の遠山　正風

久堅の雲井の庭の白雪は月日にかはそ光なる蘭　忠凞

空焚は雪にも無な馨るらん小簾捲上る宮人の袖　建通

九重の御階の櫻春待で咲かと見ゆるけさの白雪　慶永

吹風も又面白し九重の御垣の松の雪をさそひて　承昭

玉敷の其名もしるく九重に降積たる今朝の雪哉　光勝

大日枝の山風絶えて紫の庭白妙に降れる初雪　光尊

松風も降積む雪に埋れておした靜けき九重の庭　壽子

降積る御垣の雪は宮人の車の跡を付そめにける　愛子

明ぬるか衞士の焚火の影消て雪に耀く玉敷の庭　實政

咲初し花も交りて梅壺のうち面白きけさの雪哉　敦子

玉敷の庭の光も添てけり積初たる今朝の深雪に　良子

遙にも思遣れし雲の上の雪の光を今日みつる哉　道子

任天居士

時のまにとを山さとをうつめきてゆくてさひしき雪の夕くれ

○瀛船訣別　廣嶋　穗波久子

ふく湯氣の笛の音とをくなりにけり八十嶋かけて君やゆく覧

○所々立春　磐城　棚倉　鈴木まる子

花鳥のおくれさきたり里はあれと春立けふはかはらさりけり　同しひと

○裁縫

いそしみてふみ讀ひまにぬふ衣たちぬふ道のはなもをらばや　同しひと

○霞　磐城　蘆野　明日香

佐保姫はぬすみのころもきせてけり花さく咲ぬ野にも山にも

○鈴木まる子に讀て遣はしける　同しひと

たくひなきいろ香と人のめつるまで咲や大和のなでしこの花

○時計今樣　大坂　菟道春千代

月日めくれる。ひと年の。其疾ときを。時はかる。うつれと知らば。學ぶ子等。ゆめおこたふす。つとむべし

○御題綠竹年久　同しひと

さかゆく君が。おほにはに。ねさせし竹の。ふかみどり。千代に八千代に。いやなかき。千ひろのかげこそ。めでたけれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○御伽草

○木魚と叩鉦の身の上咄し
木魚たゝき鉦に向ひ。御前の身の上は羨やましい身の上だ。時によると御祭りや御踊のそりかねに借られて氣散じのともあり又は六十六部に雇はれて（次へつゞく）

PUNCH
パンチ

◎洋婦人 日本娘大さん痩て居ます何でそんなに痩て居ます 日本オホヽ私が痩て居るのでは有ません貴女が肥大過て居るので有ませう 洋否私しは肥てゐるのでは有ません學問を大さん喰ますからふ如斯に見へるので有ます 日本オヤオヤそうでそか 私の國は昔しのら女は學問か

嫌いで些とも喰ませんから如斯に卑屈に首が下り其上こんなに痩て見えるので有ませうか 洋ホヽヽウ大かたそうで有ませう是から精出して大さん學問をお喰なさい。ダカお薩と學問と

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

何方がいひと申したら必ずおつしやりませう。勿體なく〳〵と

オホヽヽヽ

（前よりつゞく）名所舊蹟を見つくすなぞ一生の徳と云ふもの。それに引かへ私しの身ハ年が年中佛壇の前で頃什て廣い世界を狹く暮し。たゞ抹香くさい斗りで面白からぬ身の上推量して下さいと云ば。叩き鉦ハいや〳〵そう片れたちのないのが憂世サ。私しなぞハ看經に叩かれるハ常々の事だか○○○かまし○い姑婆アさんの手に觸て嫁に蚊を馳せながら惡ながひ看經の御うちにもヤレ釜の下の薪が多いの燈心をもう一本滅せとの御念佛に小言を取まぜて私しの眞中を叩かずに小言を云ながら縁の方を叩いて此鉦ハ音のわるひ鉦だ鉦まで己を馬鹿にすると惡口サ。鉦も鐘木の當りこのらで私しハ腹の立まひとか。そればかりでなひ。若し近所に不幸があれハ借られて佛前に居られ夜中人のなげきを聞つらさ。夕べも夕べとて迷子に借られて人の悲しみを見て破れ大皷と一所に夜中たゝかれて歩きま。○○○○んじりともしなかつた。御前なんぞハ蒲團の上に寢ころんで居て樂な身の上。朝ばんの阿彌陀經にばく〳〵とさへ云ば役目ハすむ。私ハ結句お前が羨やましい。わゝ鉦ならずばこんなに叩かれもしまひにハテ鉦が叩きの世の中じやナア

地を替へ所ゐを異にすれば辛苦みなおなじ樂しみハ只だ其中にあるのゝ

◎ 机の塵

○倭畫師　近江　井特湖山

近頃日本古風の畫を書く人の中にハ落款に倭畫師何某と書する者往々あり此ハ大に非となり續日本紀に靈龜元年五月乙巳從六位下畫師忍勝姓改爲二倭畫師一とあり左れば漫りに書くべきよあらずと

○空氣の吸量

人の身体より發する蒸發氣と肺の臟より吐き出す惡き氣を新ふしき空氣と取かへて健康を保つ爲よハ一人に付一時間に大約二千八十二立方尺（十二尺余立方積）の空氣を要す之を升目に量れば三百二十二石なりとぞ又鑛掘人夫ハ格別に善き空氣を吸ねばならぬゆゑ是非とも六千立方尺即ハち九百二十石程を要そとぞ隨分大層なものであります

○國語の需用

方今全世界に於て何れの國の語を用ふる者が多きやと調べ見しよ左の割合なりとぞ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

英語を用ふる者　八千餘萬人　獨逸語を用ふる者　五千萬乃至六千萬人　佛語を用ふる者　四千万人至乃五千万人．以太利語を用ふる者　二千八百萬人　魯西亞語を用ふる者五千五百萬人乃至六千萬人

○牛肉を軟かにする法

牛肉を軟らかにするには之を料理する前日に厚サ凡そ二インチ位の小切に截りソーダ少ばかりを之に塗擦け置べし翌日調理する前に能くソーダを洗ひ落し後ち之を細かく切りて思ふ樣に料理すべし此法は唯だ牛肉ばかりでなく何肉にても軟らかになるなり

和書講義

任天居士

（九段）女の髪のめでたからんこそ人の目たつべかめれ。人の程心ばへなどは。物いひたるけはひにこそ。物ごしにもしらるれ。ことにふれてうちあるさまにも。人の心をまどはし。すべて女のうちとけたるいもねず。身をおしとも思ひたらず。たゆべくもあらぬわざにも。よくたへ忍ぶは。たゞ色を思ふがゆへなり

●女の髪　文選衛后興於髪鬒飛燕寵於體輕。詩君子偕老篇鬒髪如雲不屑髢也●人の程　人品品格のこと●けはひ　氣色の字に當る俗の有樣と知べし●物こし　樣子なり●うちある　常住躰の義たゞあるさまなり●うちとけたる　心を許すこと●いもねず　寢もならずなり

●思ひたらず　何とも思はぬこと●たゆべくもあらぬわざ　耐忍がたき業にもよく耐忍ぶは戀る人を一途に思ふが故なりと

誠に愛着の道。其根ふかく。源　をとし六塵の樂欲おほしといへ共みな厭離しつべし。其中にまたゞかのまどひのひとつやめがたきのみぞ。老たるも若きも。智あるも愚なるもかはる所なしとみゆる

●愛着　恩愛執着に心ひかるゝなり四十二章經に曰く使人愚蔽者愛與欲也又曰く當捨愛欲愛欲垢盡道可見矣●其根　六根の根なり六根は眼耳鼻舌身意を云ふ●をとし　推●六塵　六根に對して云ふ即はち色聲香味觸法みな戒ひの源なり●樂欲　人間世界には種々の樂あれども道にはふされば　（以下次號）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

文學士有賀長雄先生講述

○教育適用心理學　全八冊第一冊發行定價四十錢第二冊以下近刻

教育ノ基本ハ心理ニ在ルコト猶ホ醫術ノ基本ノ生理ニ在ルガ如クナルハ世ノ知ル所ナリ、故ニ文部省モ心理ニ通スルヿ教育ニ缺ク可カラサル資格ナリト公認セリ、然レ𪜈我邦此ノ學ノ良書無キハ教育社會ノ一般ニ憂慮スル所ナリ、無レ𪜈普通學ノ大ニ進歩普及セル外國ニ於テ著シタル書ヲ直ニ飜譯抄錄スルトキハ、必ス難深ニ失スベケレバ、我邦ノ事情ヲ酌量シテ新規ニ心理學書ヲ作述スルノ外無シト雖𪜈、此ノ事ヲ完クセンニハ、哲學論理ノ理論ヲ自在ニ措置叙列スルノ學識ヲ要スルカ上ニ、心理學ハ當今進歩ノ最中ニ在ルヲ以テ、歐米現時ノ學事ニ通セサルヲ得ス、新規ニ心理學書ヲ作述セシ者無キハ、此ノ難情アルニ因ルカ、弊店嚮ニ有賀先生ニ請テ如氏教育學譯註ヲ發行シタルニ、大ニ教育社會ヲ利セリトノ稱讃ヲ得タリ、故ニ今又氏ニ乞フニ心理學書ノ作述ヲ以テス、氏幸ニ諾スル有リ（會〻府下ノ教員諸君ニメ同氏ニ此ノ學ノ講義ヲ依頼スル者多シ、蓋シ同氏ハ深ク心理ニ涉獵セラレシヿ、當時同氏ト共ニ螢雪ノ苦ヲ嘗メタル學士諸氏ノ傳フル所ナレバナリ、爾來二三ノ教育會ニ於テ其著ス所ニ就テ講述セラレタルニ、精致ニメ而モ解シ易キヲ稱セサル者無シ、全部凡ソ十五章ニシテ、第一章ハ心理學ノ性質、區分、研究法ヲ總釋ス、次ノ三章ハ心理學ノ基本トスル心意ノ生理論、分解論、發育論ヲ說明ス、是レ特ニ此ノ學ヲメ我邦普通學ノ未タ深カラサルニ因テ心理ヲ解スルノ難キヲ防ク爲ニシタル者ニシテ、他書ニ就テ見ル可カラサル理論ヲ平易ニ說明スル者大タ多シ、次ニ章ヲ追テ注意、感覺、知覺、記憶、想像、概念、斷定、推理、感應、情操、意志、行狀、ヲ詳明ス凡ツ此ノ學ニ名アル大家ノ書ハ悉ク引用スト雖𪜈倍因氏心理學ハ既ニ三十年前ノ發兌ニ係リ、爾後新奇ノ發論モ亦多キヲ以テ、注意感覺以下ノ諸章ハ主トシテ正據ヲ昨年發兌ノサレイ氏教育適用心理學ニ取レリ、同氏ハ英國ケンブリツヂ大學校ウ井クトリヤ大學校及ヒ倫敦大學校ノ心理、道義、哲學ノ試驗官ニシテ、現今歐州第一等ノ心理學者トス、本書ハ全部ヲ八回以内ニ發兌シ、教科ノ用ニ便ニセンカ爲ニ、條目ハ四號活字ニシ、本文ヲ五號活字ニシ細字ヲ以註解及ヒ引書ノ丁數ヲ記シ、毎章必ス別目ヲ置テ教育ニ適用スル次第ヲ說明ス、實ニ本邦教育ノ大基本タルヘキ良書ナリ、

追白本書記載ノ事項ニ付講述者ニ御質問被成タキ御方ハ御通信次第御應答致シ候筈本書卷末ニ附記致シ置キ候間此段併テ廣告ス

東京日本橋通四丁目

牧野善兵衛

賣捌　千葉

立眞舍

○繪いりかな附**學校新聞**

郵券二錢ヲ送ラバ見本ヲ呈ス

東京本郷區元町一丁目三番地

學校新聞社

十九年二月廿七日發兌

團々珍聞五百三十三號目錄

一 洒蛙說　明らめ方の秘訣
一 珍報　種々
一 狂畫　潮むき蛤の圖○火の本念太夫の圖
一 和漢欄　狂詩歌句都々一
一 出放題　考句の解答并に新題
一 英和對譯　負惜みの官吏
一 内外奇譚　滑稽流車栗毛
一 一週要報　種々○東京各新聞社說表　第四回

發行所　東京神田雉子町　**團々社**

大賣捌　同　同　**巖々堂**

同　安藝國廣島大手筋一町目　**早速社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○小學教文雜誌

大形美製 一冊二十頁　毎月三回發兌 定價一冊四錢

欄ヲ分チテ三トナス曰ク文話曰ク文英曰ク文範文話ハ唐宋諸家ハ固ヨリ論ナク吾邦先輩ニ至ルマデ苟モ作文賦詩ヲ資スル者ハ一切網羅シテ遺ス所ナシ文英ハ江湖靑年諸君ノ文詩歌ヲ掲載シ之ヲ改竄シ之ヲ批評シテ一ノ餘蘊ナカラシム文範ハ和漢古今ノ鴻儒碩學ノ文詩ヲ登錄シ一々文法詩格ヲ講明シテ作文賦詩ノ要ヲ知ラシム加之時々歐文ヲ掲ゲ之ニ和譯ヲ施シテ譯文ノ要ヲ領得セシム又連月文詩歌ノ題ヲ課シ遍ク諸君ヲシテ之ヲ作爲セシメ其優等ノ者ヘハ無料ニテ壹部宛拜呈ス其編輯ノ精選ナル改竄ノ懇到ナル實ニ文海ノ指針文山ノ一杖トモ謂フベキ好書ナリ

本紙代價表

部數	本誌郵税價	郵劵代用
五部	二十四錢	二十六錢
十部	四十七錢	五十二錢
二十部	九十錢	壹圓
三十部	壹圓三十錢	一圓四十三錢
壹年卅六部	壹圓五拾錢	一圓六十五錢

廣告一行代價

一行十九字詰	一日	二日以上五日迄	六日以上
自一行至十行	五錢	三錢	二錢五厘
自十一行至卅行	四錢	二錢五厘	二錢
卅一行以上	三錢五厘	二錢	一錢七厘

發兌　東京馬喰町貳丁目　興文社

小牧櫻泉先生序
藤野海南先生序

○詩文用材故事詳解

松村南涯先生著　全一冊　定價郵税共廿四錢 郵劵代用不苦

詩ヲ賦シ文ヲ作ルニハ典故ヲ解セザルベカラザルハ固ヨリ言ヲ竢タズ然ルニ世ニ典故ヲ解釋スルノ書甚タ少シ一二之アルモ粗漏杜撰概ヲ看ルニ足ラズ此書ハ南涯先生多年六經百家ノ書ニ就テ典故ヲ剔抉シ之ヲ乾坤時候等ノ部門ニ分チテ一々解釋ヲ施シタレバ典故ヲ搜索セント欲スル者ハ一タビ卷ヲ繙カバ地ニ俯シテ芥ヲ拾フヨリモ易カラン事實ニ文人韻士座右一日モ欠クベカラザルノ珍書ナリ

發兌書肆　東京馬喰町貳丁目　石川治兵衛

發行所　東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　績文舍

持主兼印刷人　松本義弘
編輯人　山田常治

女學叢誌賣捌所

大賣捌所	東京芝區愛宕町一丁目三番地	修正堂
同	神田區雉子町	團々社
同	日本橋區新葭町	巨明堂
同	牛込肴町十七番地	活神堂
同	芝區愛宕下町二丁目	高槻堂
同	蠣売町貳丁目	信文堂
同	本鄕區本鄕元富士町二番地	盛春堂關田
同	同本鄕春木町貳丁目	解明堂
同	元數寄屋町壹丁目	東海堂
同	神田區淡路町	巖々堂
大坂	府備後町四丁目	岡嶋支店
千葉	縣千葉本町一丁目	立眞舍
藝州	廣嶋大手町一丁目	早速社
江州	彦根西内大工町	新々堂
陸前	國仙台大町四丁目	木村文助
越後	長岡裏三之町	大橋書房

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY